

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第10号

目次

北海道大学関係資料と大学文書館設立

井上 高聡 2

京都帝大の朝鮮人学生

伊藤 孝夫 4

科研費研究会「大学所蔵の歴史的
公文書の評価・選別についての
基礎的研究」に参加して

河西 秀哉 6

日誌 8

大学文書館の動き：

法人文書の一部を廃棄しました

..... 9

人の動き 9

京大における「御真影」

西山 伸 10



時計台2階大ホールでの学旗学歌制定式の様子(1940年2月11日)

京大では1939年に学旗学歌が制定されることが決定し、翌年2月11日の紀元節拝賀式後に制定式が挙行された。大学文書館の所蔵する『学旗学歌制定ニ関スル書類』には、「紀元節拝賀式順序」の中に「御真影ノ幕ヲ開ク」との記述があり、写真右側の幕の中に見えるのが「御真影」である(10頁に関連記事)。

北海道大学関係資料と大学文書館設立

北海道大学大学文書館助手 井上 高聡

1、大学文書館設立までの経緯

北海道大学では、1966年の創基90周年記念展示会の開催を契機に附属図書館が大学沿革関係資料の収集・保存をはじめた。1971年にこれらの資料の収集・保存と利用・公開の体制整備のため、附属図書館に北海道大学沿革資料室を設置した。沿革資料室に収集された資料は、1976年から始まった『北大百年史』の編纂において中核的な資料として活用され、一部は覆刻がなされた。その後、『北大百年史』編纂過程で収集された沿革関係資料も、編纂事業終了と共に沿革資料室へ納められた。沿革資料室は、日本北辺を中心とした地域の文献をコレクションとする附属図書館北方資料室に併設されており、実際には北方資料室の図書館員によって管理・運営された。独立した資料室とは言えなかったため、十分な資料収集・整理活動をするのは難しい状況であるが、資料の受け入れ窓口や資料リファレンス担当としての役割を果たしてきている。

1998年に『北大百二十五年史』の編纂事業が開始される。その事業体制の検討に当たった125年史世話人会において、東京大学や東北大学を例に、北海道大学においても北方資料室(沿革資料室)とは別に大学史資料を取り扱う組織を設ける必要があるという意見が既に出されていた。

具体的に大学文書館設立に向けて動き出すのは、『北大百二十五年史』完成の目処が立ち、編纂終了後の収集資料等の取り扱いが視野に入り始めた2002年である。125年史編集室関係者の働きかけにより、大学アーカイヴ

ズを設立する可能性について検討する非公式タスク・フォースが設置され、その答申をもとに2003年には正式な大学アーカイヴズ設立検討ワーキング・グループが発足した。同年12月には「北海道大学文書館設置構想」がまとめられ、評議会で承認を受けた。この間、2002年から2005年3月までの大学文書館設立の動きについては、2004年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(1))研究成果報告書『大学所蔵の歴史的資料の蓄積・保存ならびに公開に関する研究』(研究代表：西山伸、2005年3月)所収の「北海道大学文書館」の設立準備」と、小樽商科大学百年史編纂室編『緑丘アーカイヴズ』創刊号(2005年3月)掲載の「北海道大学文書館の設立準備について」において述べているので参照願いたい。

非公式タスク・フォースでの検討時から、設立を目指すアーカイヴズでは沿革資料室の統合や125年史編纂事業における収集資料の整理・活用と共に、大学の行政文書の整理・保存を中心的な役割と位置づけていた。『北大百二十五年史』編纂にあたり、大学史編纂状況を確認するため、寺崎昌男氏、京都大学百年史編集史料室(当時)の西山伸氏、東京大学史史料室(当時)の中野実氏を招いて講演をしていただき、その際に大学アーカイヴズをめぐる状況の知見をも得ることができたためである。

2、大学文書館の体制

2005年5月に北海道大学大学文書館が設立された。北海道大学大学文書館規程では大学

文書館は「本学の保存期間が満了した法人文書及び本学の歴史に係る各種資料の収集、整理、保存、調査研究等を行い、閲覧、公開等の利用に供することを目的とする」学内共同教育研究機関と規定されている。

設立時、専従の大学文書館員は助手1名で、館長には副学長、副館長には文学研究科教授、運営委員会に全学から7名の教員(館長・副学長を含む)が兼任した。このほか、兼務教員として文・教育・工・理・農から計5名が着任した。6月から専従の大学文書館員として事務補助員(非常勤)1名が加わった。その後、12月から資料整理員として2名のアルバイトを雇用したが、基本的には2名の大学文書館員によって業務を進めている。

スペースとしては、附属図書館4階に事務室兼資料整理室約50m²、倉庫約16m²、同1階に資料置き場約50m²の計約116m²を借り受けている。大学文書館の正式な建物として約800m²程度の建物の確保を予定はしているが、5年先、10年先の話になりそうである。当面、一時的に借用できる新たなスペースの確保を図っている。

3、大学文書館1年目の業務

2005年5-12月の業務については、『北海道大学大学文書館年報』第1号(2006年2月)に簡易に記録した。農学部建物の改修が行なわれるため、農学部関係資料の調査を優先した。特に、農学部建物内の資料保存室に保管されていた旧農学部附属演習林(現在は北方生物圏フィールド科学センター研究林)関係文書559箱の移管を受けて、整理に当たった。文書の内容は、1900年代初頭から1980年代までの庶務・会計・演習林経営関係の簿書・ファイルである。文書選別を試行したところ、保存・廃棄の割合は箱数でほぼ半々となった。

このほかにも、農学部関係文書の調査を行な

い、仮目録を作成した。また、経済学部・理学部から一部関係文書の移管を受けて整理を行なった。

資料の閲覧業務は開始していないが、リファレンスには北方資料室や総務部広報課と連携しながら対応した。

4、1年目を終えて

2006年4月から、事務補助員のポストが専門職員(常勤)に変わる。組織体制としては画期的であるが、専従大学文書館員2名の体制は変わらない。

資料の調査・整理に関しては、1年目には農学部建物改修という事情があったため農学部関係資料を手掛けた。しかし、事務局文書に関し未調査であるため、大学公文書の全体構成を念頭にそれぞれの文書を位置づけることが難しく、文書の選別に当たり戸惑うことが多かった。2年目には事務局文書を調査する予定である。

大学文書館のスタッフ中、兼務教員とは大学史研究に協力願うことを念頭に人選している。北海道大学史研究については、札幌農学校史研究に偏っていて帝国大学時代の研究が薄いという状況があり、総長や館長はその点の充実を大学文書館に期待しているようである。1年目には、定期的に研究会を開催することや科研費申請を企図したもののほとんど進めることはできなかった。資料の調査・整理に掛かるとそれで手一杯になってしまうためである。2年目も状況としては変わらないと思われる。現場の大学文書館員としては、当面、資料の調査・整理を最優先したいと考えている。

京都帝大の朝鮮人学生

京都大学法学研究科教授
大学文書館教授(兼任) 伊藤 孝夫

尹東柱(ユン・ドンチュ、1917～45)は、韓国・朝鮮の国民的詩人の1人である。彼は1943(昭和18)年、同志社大学英文学科在学中に治安維持法違反で検挙され、45年2月に獄中死を遂げた。その後48年に初めて遺稿詩集が出版され、やがて植民地時代朝鮮を代表する詩人として知られるようになった。悲痛な生涯だが、残された詩はどれも若者らしい清冽さに溢れ、先日亡くなられた茨木のり子さんは、立原道造と比べながらオマージュを書いておられた。

1995年には同志社大学構内に彼の詩碑が建てられている。わざわざ訪ねてくる熱心な韓国人旅行者も多いといい、先日私が前を通りかかったときも、いくつもの花束が添えられていたのが印象的だった。2002年には詩碑建立7周年として、本学の水野直樹教授が「朝鮮人留学生たちの京都」と題して記念講演を行っておられる。以下にはこの水野教授の講演記録に教えられた部分も多い。

尹東柱の検挙理由は、彼のいところで幼馴染であり、当時は京都帝大文学部に選科生として在籍していた宋夢奎(ソン・モンギョ)らとともに朝鮮独立運動に従事したというものである(同時に検挙された三高生・高熙旭は不起訴処分)。彼らの検挙・裁判から死に至るまでの経過については、尹東柱詩集の訳者である伊吹郷氏が丹念に探索して紹介しておられる(『尹東柱全詩集 空と風と星と詩』伊吹郷訳、影書房)。しかし判決文などに現れている彼らの「運動」なるものは、要するに互いの下宿を訪ねあい、「内鮮一体」の名の下に朝鮮語をはじめ固有文化への圧迫が強まっていることに憤り、将来の朝鮮独立の日を夢見て民族文化・民族意識保持の必要を論じ合った、というに尽きる。これは当時のほとんどの朝鮮半島出身知識人に共通する心情の表明であるにすぎないであろう。あるいは宋夢奎が十代終わりの一時期、家出して、南京に

あった金九(キム・グ)の大韓民国臨時政府に接触したという経歴が官憲の特別の関心を惹いた可能性はある。ただしその接触というのも、臨時政府の活動実態には失望して1年足らずで帰郷した、というものである。



後列右が尹東柱、前列中央が宋夢奎(『尹東柱全詩集 空と風と星と詩』影書房より)

彼らのこうした運命をどのように位置づけるべきか。あの時代を生きた植民地出身学生たちの経験はどのようなものだったか。以下少しばかり、戦前の京大に在学した朝鮮半島出身者たちの周辺を調べてみた。

まず、どれほどの数の朝鮮人学生が京大に在学していたのか。残念ながら文書館にも、すぐにそれを教えてくれる記録はないようである。一つ一つ学籍簿で出身地を調べる方法もなくはないだろうが、今ここでは参考までに、内務省警保局作成の「社会運動の状況」各年度版に見える数字を示しておこう。1929(昭和4)年以来のこの報告書には、国内の朝鮮人学生数の在校別調べが掲載されており、そのうちの「京都の官公立大学」在学者数はほぼ、京都帝大在学者数と見なして大過ないと思われる。以下のようなようである。

年度	1929	30	31	32	33	34	35
人数	47	64	63	32	47	29	33
年度	36	37	38	39	40	41	42
人数	28	27	54	41	69	50	69

増減はあるが平均すれば毎年40~50人、1学年に15・16人ということになろうか。なおやはり同じ資料によれば、「京都帝大朝鮮人留学生同窓会」が1923年以来存在し、42年にはその会員数が340人に達しているという数字もあり、参考になろう。

京大の朝鮮人学生の受け入れ数は、他と比べて多いわけでも少ないわけでもないだろう。在学者数でいえば東京所在の私立大学を総計した分が圧倒的であり、また中学校以上の留学生全体で捉えれば、京都は日本に来る朝鮮人学生全体のおよそ1割程度を占めていた。

京大に留学生同窓会が存在したことは前述の通りだが、同志社・立命館など私学在学者をも含めた「在京都朝鮮留学生学友会」という組織も大正初期から存在した。その前身である留学生親睦会の創設に関わったのが、京大法科学生であった金雨英(キム・ウヨン)で、彼や、彼を含む朝鮮人学生たちと、東大教授吉野作造との間の交流については、松尾尊兌先生が詳しく紹介しておられる。なお金雨英はのち弁護士として三・一独立運動指導者らの弁護も行ったが、その後日本の外務省に勤務し、戦後は親日派として断罪された。

そもそも内務省警保局作成の記録に、こうした朝鮮人留学生の動静が詳細に現れているのは、彼らの「運動」に当局が神経をとがらせていた証しであって、実際そこには数多くの朝鮮人学生の検挙事例が記録されている。それらの名前の中から京大生を拾ってみよう。

1930年代前半の検挙者は、日本の共産主義運動に、日本人学生たちの「同志」の1人として加わっているような事例である。1930年検挙の金麟伊、31年検挙の呉孝根、33年検挙の朴英出・金鐘律・劉亨植らの名が、日本人学生の中に混じって見える。1939年検挙の成昌煥になると、山口高校在学中に同校の朝鮮留学生間で民族主義団体を組織、その一員として独立運動に関与したとされた。40年には京大生および京大卒業生7名(朴斗成、金培濬、許日禧、文在洙、金昌煥、金在均、韓根鎬、ほかに三高生2名)が検挙される事件が起きた。彼らは佐賀高校在学中にマルクス主義研究会を組織し、ひきつづき多数が京大に進学し、朝鮮民族解放運動を策動していたも

の、とされている。

ほぼ以上の通りだが、調べてみると京大生の検挙者数は案外に少ない。しかしさらに考えてみると、京大進学者はまさに植民地社会において選びに選び抜かれたエリートたちであって、内面の思いはともかく、不用意な「運動」への参加で将来を閉ざすことへの警戒感、は彼らのうちにあつて大きなものであつたに違いない。他方、いくら「学問」に没頭したとしても、自らの置かれた社会環境に目も耳も塞いだままで生きられたはずもない。

京大の朝鮮留学生の中からは、李泰圭(イ・テギユ、1902~92)と李升基(イ・スンギ、1905~96)という2人の傑出した科学者が生まれている。ともに京大に残って研究を続け、李泰圭は化学の理論研究に、李升基は応用化学の分野で合成繊維の研究に業績を挙げ、それぞれ京大において教授ないし助教授ポストも得ている。戦後はそろって帰国してソウル大学の教壇に立ったが、彼らのその後の歩みは決して平穏ではない。混乱した祖国の現状に失望した李泰圭は安定した研究環境を求めて48年に渡米し、韓国を代表する科学者として国際的名声を得つつも、70年代まで帰国しなかった。一方、李升基は朝鮮戦争の中で越北、以後は共和国において科学界の偉人として尊敬を集め、最高人民会議の代議員も務める。2人の京大出身科学者の生涯も、このように歴史の激動に彩られたものだった。

京大出身の研究者として、さらに崔鉉培(チェ・ヒョンベ、1894~1970)の名も逸することができない。京大文学部で学んだ崔鉉培は、ハングル研究の開拓者として知られている。帰国後、ソウルの延禧専門学校に教鞭をとっていた崔鉉培は、1937年には画期的なハングル文法の研究書(「ウリマルボン」)を完成させる。この延禧専門学校に学び、崔鉉培の授業にも深い感銘を受けていたのが、日本へ旅立つ前の尹東柱であった。42年10月、尹東柱が同志社大学に入学した頃、ソウルでは崔鉉培が治安維持法違反の嫌疑で検挙されていた。戦時下において、まさに民族の言語を研究する行為自体が許すべからざる抗日運動であるとされた、「朝鮮語学会」事件がこれである。

科研費研究会「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」に参加して

京都大学大学文書館助手 河西 秀哉

私は2005年5月に京都大学大学文書館に着任しました。それまではアーカイヴズを利用する側にあり、大学文書館に勤務して実務を経験し、少しずつアーカイヴズというものについて考えるようになってきました。正直なところ、歴史研究者としては、評価選別に対して抵抗感があるのは否めません。しかし一方で、物理的に限られた書庫を見ると、今後とも継続的に文書を受け入れていくためには、評価選別せざるを得ない／しなければならないとも考えます。このような葛藤の中で、日々の職務にあたっています。

科研費研究会「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」2005年度第3回目の研究会は、3月13日から14日にかけて、2004年から評価選別を本格的に行っている沖縄県公文書館で開催されました。前述のような日々の葛藤の中でアーカイヴズについて学んでいる私にとって、他のアーカイヴズの現状・先進的取り組みを知ることができる本研究会は、アーカイヴズとは何かを学ぶことができる重要な機会です。

1日目は簡単な自己紹介の後、沖縄県公文書館公文書専門員の豊見山和美氏より、「沖縄県公文書館での評価選別の概要と課題」が報告されました。豊見山氏の報告を聞いて興味深かったのは、次の二点です。第一に、沖縄県公文書館では二段階の評価選別を行っている点。県公文書をすべて公文書館に移管・収集するのではなく、収集しない文書の基準

を策定し、それ以外の文書が公文書館に入ってくるという仕組みを1997年から採っています。つまりは、すでに公文書館に移管・収集される時点で第一次選別が行われていることとなります。具体的に公文書館に収集されない文書として、支出文書・帳簿、出勤簿、出張命令書、職員手当など、日常のある種ルーティン化した業務の文書があります。京都大学がこれまで行ってきた評価選別の基準は、ちょうど沖縄で言う第一次選別の基準と同じであり、その意味で京都大学大学文書館は、沖縄の一次選別の段階にあると言えます。京都大学では、基本的には保存期間を満了した文書全てを文書館に移管し、その上で評価選別を行っており、この方式を採ると原課からの移管漏れは少なくなります。一旦全ての文書が移管される分、評価選別されるまでに文書館の書庫は満杯となり、私たちの業務は多くなります。これまでのような形がよいのか、沖縄のように選別した上で移管をするのがよいのかは、今後考えるべき問題です。また、沖縄が昨年から行っている第二次選別は、私たちの評価選別基準よりもさらに徹底されています。こうした自治体で行っている評価選別基準を参考にしながら、「大学」としての独自の営みを勘案し、大学アーカイヴズにおける評価選別基準を作成していくのは、大学文書館の大きな課題と言えます。

興味を持った第二は、沖縄県公文書館ではファイルごとではなく、それぞれの部分ごと

に文書の内容を見ながら評価選別を行い、保存廃棄している点です。現在京都大学では、文書ごとに評価選別を行っています。つまりは、そのファイルにたとえ1枚でも保存の対象となる文書が含まれていた場合は、ファイルごと保存することになります。現在ではそれでもまだ収納スペースは足りていますが、いずれそれも限界になり、ファイル単位から文書単位での評価選別の必要性が生じる可能性があります。しかし一方で、ファイルを崩してしまうことは、政策過程を見失わせてしまったり、そのファイルにその文書が綴じられている意味が分からなくなってしまう危険性もあります。これについても、慎重に基準を考えていくことは大きな課題と言えます。



1日目の後半は、参加者を3つのグループに分け、沖縄県の公文書を実際に見ながら評価選別を行う実習を実施しました(写真上)。文書の「機能的価値(中核的か補助的か)」「一次的価値(業務運営、法務的、財務的)」「二次的価値(証拠的、情動的)」について、それぞれ該当するか、またそれぞれの価値の高低を評価し、文書を保存するか廃棄するかを選別していきます。その後その結果を報告し、問題点を整理しました。沖縄県公文書館で担当されている方による「答え合わせ」もありましたが、おおよそ私たちの評価選別結果と

一致していました。大学アーカイヴズに従事する私たちの評価選別基準が、先発の地域アーカイヴズの蓄積と方向性が同じであることを確認できたことは重要なことです。課題としては、前述の各基準をそれぞれどう評価するのか、個々によって判断が分かれ、容易には判定しづらいということが挙げられます。ともすれば個々の価値で判断するよりも、全体としての印象で評価選別の判断を下すこともあり、個々の価値基準をより明確化し、誰もがそれを使って評価選別できるようにする必要がありますと考えます。

2日目は沖縄県公文書館を見学させていただきました。ハード面の充実さにはとにかく驚きましたが、その充実した書庫もかなり満杯になってき



ているという現実にも驚きました(写真上)。継続的な文書移管のために評価選別を実施するという事は、沖縄県公文書館だけではなく、私たち大学アーカイヴズも抱える大きな問題です。公文書館内を見学させていただいたことで、より評価選別の重要性を認識しました。こうした書庫の物理的制約が、評価選別論を深化させる一つの要因になっていると言えるでしょう。

今回、研究会を通して学んだ沖縄県公文書館のアーカイヴズとしての先進的取り組みと現状を生かし、発展させていくかは、本研究会で今後より深く考察される問題だと考えます。

【日誌】(2005年10月～2006年3月)

- | | | | |
|-----------|---|-----------|---|
| 2005/10/3 | 井上一志氏より、井上毅写真を寄贈。 | | |
| 10/4 | 西山助教授、「学徒出陣」に関する聞き取り調査のため出張(芦屋市)(10月25日も)。 | 12/15 | 橋本伸也氏より、橋本雅弘関係資料を借用。 |
| 10/6 | TBSより、敗戦前後の学生服・学帽について照会。 | 12/15 | 長周新聞、「学徒出陣」調査につき取材。 |
| 10/11 | 学外より、東大路沿いの石垣について照会。 | 12/26 | 大学文書館運営協議会。 |
| 10/11 | 小野和子氏より、「矢野事件」関係資料寄贈。 | 2006/1/11 | 読売新聞、「学徒出陣」調査につき取材。 |
| 10/12 | 西山、国立科学博物館・筑波大学・東京大学史史料室へ出張(~13日)。 | 1/12 | 旧研究協力部研究協力課移管法人文書の公開開始。 |
| 10/18 | 楽友会館書庫・時計台記念館地下書庫間で文書移動。 | 1/16 | 第3回企画展「京都大学における『学徒出陣』」内覧会、マスコミ取材。 |
| 10/27 | 西山、東京大学史史料室へ出張。 | 1/17 | 第3回企画展「京都大学における『学徒出陣』」開催(~4月2日。於京都大学百周年時計台記念館歴史展示室)。 |
| 10/31 | 大学文書館教員会議。 | 1/17 | 朝日新聞、「学徒出陣」調査につき取材。 |
| 10/31 | 『京都大学大学文書館だより』第9号、発行。 | 1/17 | 河西助手、天皇事件調査のため大阪市立大学大学史資料室へ出張。 |
| 11/4 | 西山、「学徒出陣」に関する聞き取り調査のため出張(大山崎町)(11月17日も)。 | 1/19 | 毎日新聞、企画展につき取材。 |
| 11/5 | 京都橘大学より、大学文書館の施設見学のため来館。 | 1/19 | NHK、「学徒出陣」調査につき取材。 |
| 11/7 | 西澤一雄氏より、西澤一衛関係資料を寄贈。 | 1/20 | 加藤利三氏より、大学院入試関係資料寄贈。 |
| 11/10 | 西山、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(全史料協)全国大会および研究会に出席(於福井県国際交流会館)。 | 1/23 | 大学文書館教員会議。 |
| 11/15 | 京都大学図書館機構公開事業展示「京都大学の学術情報基盤の未来を考える」開催(~12月18日。於京都大学百周年時計台記念館歴史展示室)。 | 1/23 | 大学文書館所蔵の非現用法人文書の一部を廃棄(~27日)。 |
| 11/16 | 神戸大学百年史編集室より、大学文書館の現状・設備について照会のため来館。 | 1/23 | 国文学研究資料館より、大学文書館の現状・設備について照会。 |
| 11/18 | 国立女性教育会館より、女性関係資料所蔵について照会。 | 1/25 | 読売新聞、第三高等学校の歴史につき取材。 |
| 11/26 | 西山、京都大学11月祭において、「京都大学における『学徒出陣』」と題して講演(於京都大学)。 | 1/25 | 京都民報、企画展につき取材。 |
| 11/29 | 成蹊大学史料館より、大学文書館の現状・設備についての照会のため来館。 | 1/31 | 毎日新聞、「学徒出陣」調査につき取材。 |
| 11/29 | 工学研究科より、朝永正三関係資料を寄贈。 | 2/5 | 2004年度保存期間満了の事務本部および各部局の法人文書搬入(~8日)。 |
| 11/30 | 西山、東北大学史料館・東京大学史史料室へ出張(~12月1日)。 | 2/10 | 京都大学新聞社より、第三高等学校の校舎・学生の様子について照会。 |
| 12/8 | 台北市台湾綜合政策協進会、李登輝前総統在学時の農学部について取材。 | 2/15 | 小田輝子氏より、小早川欣吾関係資料を寄贈。 |
| 12/9 | 読売新聞、「学徒出陣」調査につき取材。 | 2/20 | 人間・環境学研究科より、玉名程三関係資料寄贈。 |
| 12/12 | 大学文書館教員会議。 | 2/24 | 科学研究費研究会「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」2005年度第2回研究会開催(於広島大学)。 |
| 12/15 | 国立国会図書館憲政資料室より、 | 2/28 | 台湾・中天電視、戦時期の京大につき取材。 |
| | | 3/2 | 「京都大学における『学徒出陣』」および劇団四季「南十字星」に関するマスコミ取材。 |
| | | 3/3 | NHK、「学徒出陣」調査につき |

- 取材。
- 3/8 伊藤七郎氏より、京大ポータル関係資料を寄贈。
- 3/9 大学文書館教員会議。
- 3/13 科学研究費研究会「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」2005年度第3回研究会開催(～14日。於沖縄県公文書館)。
- 3/14 加藤利三氏より、非常勤職員実態調査等の資料寄贈。
- 3/16 岡田由紀子氏より、中井正一関係資料を寄贈。
- 3/16 中央大学より、大学文書館の現状・設備について照会のため来館。
- 3/17 立教大学より、大学文書館の現状・設備について照会のため来館。
- 3/23 京都東ロータリークラブ「京大キャンパス見学とおもしろ

- 教室」で中学生に展示案内。
- 3/24 『京都大学大学文書館研究紀要』第4号、発行。
- 3/24 NHK、「学徒出陣」につき取材(3月27日も)。
- 3/25 朝日放送、「学徒出陣」につき取材(4月5日放映)。
- 3/25 毎日放送、時計台の歴史につき取材(3月27日も。3月28日放映)。
- 3/28 大学文書館運営協議会。
- 3/29 西山、国立国語研究所へ出張。
- 3/29 佐倉市立美術館より、楽友会館内装・家具について照会のため来館。
- 3/31 常設展「京都大学の歴史」図録、発行。
- 3/31 保田その助手、大学文書館助手を退任。
- 3/31 教務補佐員田中智子退職。
- 3/31 事務補佐員高井多佳子退職。

大学文書館の動き

法人文書の一部を廃棄しました

2006年1月23日から27日にかけて、大学文書館では所蔵する非現用法人文書の一部の廃棄を行いました。法人文書の廃棄は、昨年度に続き、2度目となります。現在各部局から搬入された非現用法人文書を収蔵している近衛館書庫に、今後移管される文書を保管するスペースを確保するための措置です。現在、各部局から移管された文書は24,954点所蔵しておりますが、今年度はそのうち、9,116点(約37%)を廃棄しました。内訳は、物品の購入記録や研究教育に関連する支出などの記録、教職員の福利厚生関係の記録が中心です。



(廃棄作業中の書庫の様子 床に置かれた文書は廃棄予定文書)

昨年度・今年度と廃棄作業を行う中で、保存と廃棄の問題で様々な課題が見えてきました。保存スペースという物理的問題と部局の保存希望をどう連関させて考え、評価選別の基準を策定していくのか。非現用法人文書の廃棄に関する責務は大学文書館の重要な業務であり、今後も科研費研究会などの議論や実践を積み重ねていながら、この課題を考えていきます。

人の動き (2005年10月～2006年3月)

2006年3月31日 保田その、大学文書館助手を退任。

京大における「御真影」

京都大学大学文書館助教授 西山 伸

戦前日本の教育現場における「御真影」(宮内省の用語では「御写真」)の果たした役割の重要性は、改めて述べるまでもない。1880年代から全国の学校への下付が本格化し、1890年発布の「教育ニ関スル勅語」とともに、学生生徒に対する教化の中心となった。

京都帝国大学にも、創立とともに御真影は当然下付されたと思われるが、そのことを示す資料は残念ながら見つからない。京大の儀式に御真影が登場する最初の資料は、創立翌年の1898(明治31)年11月3日の天長節奉祝式関係のものであり(『学内達示書類』自明治三十年至明治三十八年、資料番号01A00244)、その式次第には「総長幌ヲ開キ復席職員学生一同最敬礼ヲ行ヒ御真影並ニ親署ノ勅語ヲ拝ス」とある。そして、その後は各種の儀式に用いられるようになった。

学校で御真影を保管していた建造物としてよく知られているのが神社様式の奉安殿だが、ああいっただものが造られるのは概ね戦時体制が進行していく1930年代以降であり、それまでは校舎に奉安室や奉安庫を設けているのが普通だった(久保義三など編『現代教育史事典』東京書籍、原武史など編『岩波天皇・皇室辞典』岩波書店)。京大でも、独立した奉安殿は結局造られておらず、御真影は奉安庫に置かれていたようである。その奉安庫もどこに設けられていたかよく分からない。以前筆者が『京都大学大学文書館研究紀要』第2号で紹介した『昭和十八年八月 日誌』(資料番号01A00543)の1944年4月29日の記事に「御真影ヲ新奉安庫ニ奉遷ス(天長節拝賀式終了後ニ於テ階上ノ奉安庫ヨリ階下ノ新奉安庫ニ奉遷ス 二個ノ奉納櫃ヲ夫々書記二名俸ニテカツギニ回ニ分ケ奉納(庶務課長先導)、新奉安庫入口ノ処ニハ総長、書記官、営繕会計両課長奉迎、櫃ハ書記二名ニテ庫内ニ安置セリ)」とあるので、当時儀式を行っていた時計台の2階にあった奉安庫が1階に移されたということは分かるが、それぞれどの部屋だったかは不明である(なお、東北大学史料館には東北帝国大学の本部棟にあった奉安庫に置かれていた金庫が展示してある)。

やがて戦局が深刻化してくると、御真影の疎開が考慮され始める。同じ『昭和十八年八



月 日誌』の1944年7月4日には「午后三時御真影奉遷(非常時)予行演習ヲナス奉遷予定所理学部物理学教室元殿下休憩室、医学部病理学教室杉山教授室」とある。さらに空襲によって全国の都市が大きな被害を受けるようになると、実際に疎開が行われることとなった。『御真影奉遷関係書類』(写真、資料番号01A00511)によると、1945年6月16日に三高など他の8校と愛宕郡(現在は左京区の一部)の大原国民学校に現天皇など8人の皇族の御真影および「御親書ノ勅語」を疎開させている(小野雅章「御真影神格化の過程 - 「奉護」施設の変遷を中心に -」『日本の教育史学』第34号、1991年、にも記述されている)。そして疎開後は、9校輪番で職員を派遣して宿直を行ったほか、周辺の整備のための勤労奉仕を京大職員で行っていた。

御真影が京大に戻ってくるのは、敗戦後2ヵ月以上経過した10月27日のことであり、さらに文部省の通牒にもとづいて翌年1月に宮内省京都地方事務所に戻還される。なお、この時の通牒には「今上陛下ノ御真影ハ将来新制定ノ御服装ノモノニ改メ」るために返還せよと述べているが、もちろん京大においてはそのようなことはなかった。

国家の教育研究機関とされていた帝国大学時代、御真影や勅語がどのように扱われていたのか、不明な部分は非常に多い。さらなる史料の発掘が求められる課題である。